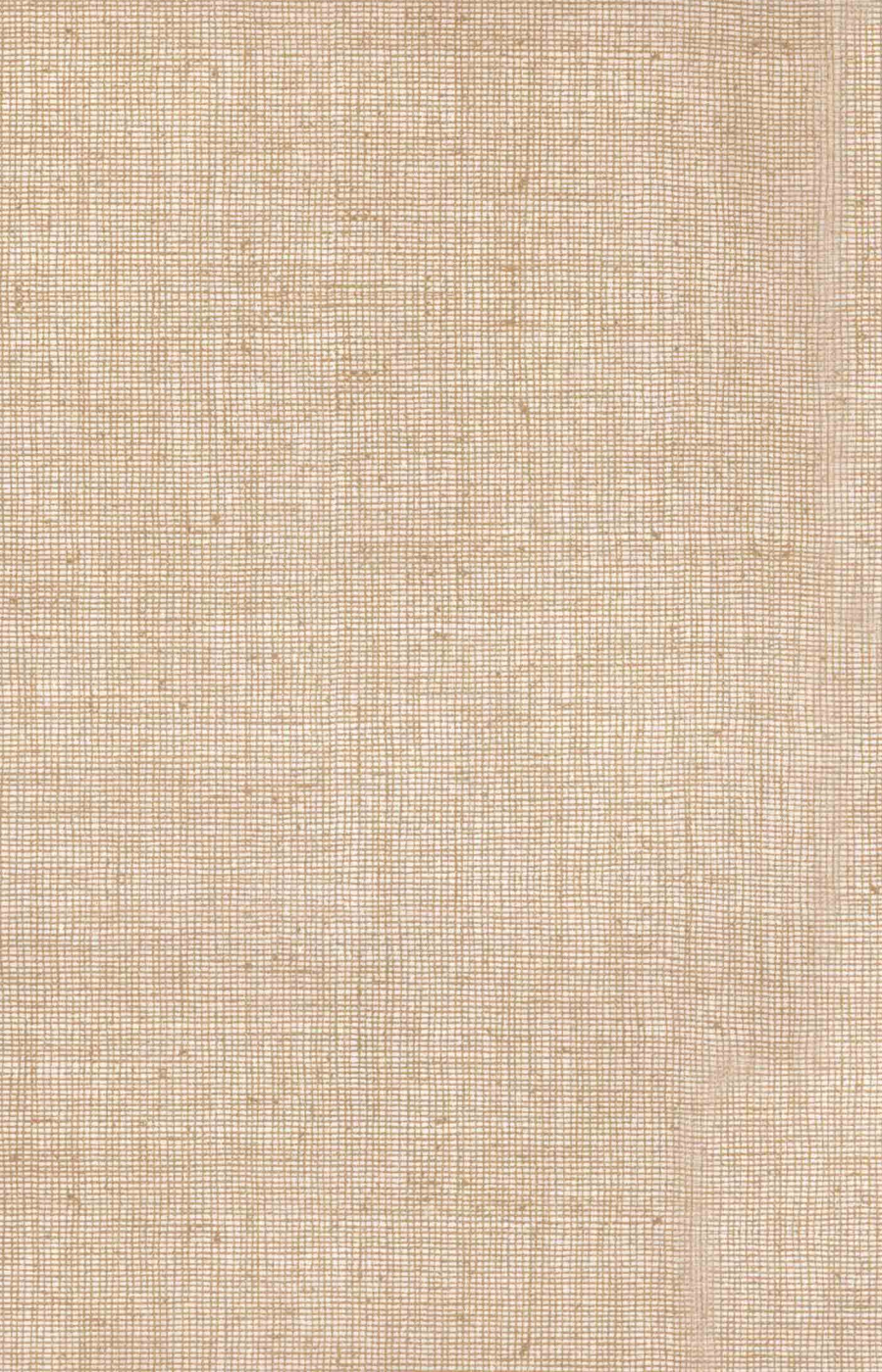




黒岩重吾

紅蓮の女王

光
文
社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編歴史小説 ^{ぐれん}紅蓮の女王

昭和53年6月10日 初版1刷発行

著者 ^{くろ}黒 ^{いわ}岩 ^{じゅう}重 ^ご吾
発行者 小保方 宇三郎
印刷者 小林 清
東京都港区三田 5-12-1
図書印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京 6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(図書印刷)

© Zyūgo Kuroiwa 1978

(分)0-0-93(製)92035(出)2271

Printed in Japan

目次

紅蓮ぐれんの女王

対談・

『紅蓮の女王』の背景

尾崎秀樹

黒岩重吾

装
幀
枡
折
久
美
子

紅蓮ぐれんの女王

黒岩重吾

幼名を額田部皇女ぬかたのひめみこといった炊屋姫かしきやひめは、色白の美貌で、当時の女人には珍しく引き締まった牙え切った顔をしていた。勝ち気な性格で、才氣走っている。書紀によると十八歳で三十代敏達天皇の皇后になった。

天皇といっても、天智朝てんじまでは、天皇という呼称はない。実際は敏達の和風諡名しめいである譯語田渟中倉太珠敷大王たなくらふとたましきと書かなければならないが、ここでは、分かりやすく漢風諡名しめいを使い、敏達大王みんたうとしておく。この十八歳で立后したという書紀の説も怪しく、西暦六二八年、七十五歳で死亡した、というから、皇后になったのは、二十三歳ということになる。

おそらく十八歳で、敏達の妃になり、敏達の最初の皇后、広姫ひろひめが亡くなったので、翌年二十三歳で皇后になったのであろう。

敏達との間に七子を生んだ。

菟道貝^{うじのかい}鎭^{だいのひめみこ}皇女^{（聖德太子妃）}、竹田^{たけだの}皇子^{みこ}、小墾^{おわりだの}田^{ひめみこ}皇女^{（押坂彦人大兄皇子妃）}、鸕^{うもりの}鷺^{ひめみこ}守^の皇女^{（聖德太子妃）}、
尾張^{おわりの}皇子^{みこ}、田^た眼^め皇女^{（舒明妃）}、桜井^{さくらい}弓^{のゆみ}張^{はりの}皇女^{（舒明妃）}、の七子である。

実際に七子を生んだかどうか、疑問だが、それはともかく、敏達^{みんたつ}の寵愛^{ちゆうあい}ぶりが窺^{うかが}われる。

五八五年敏達十四年に、蘇我^{そが}馬^{うま}子^こは、物部^{ものべ}守^{のり}屋^やを始^{はじ}めとする大^お王^お家^のの群^{ぐん}臣^{しん}に對^{たい}して、崇^{すく}仏^{ふつ}派^{はい}と
しての確^{かく}固^こたる意^い志^しを示^しすべく、大^お野^の丘^か（甘^{あま}檀^{かし}丘^{のか}一^{いっ}帶^{たい}の丘^か陵^{りやう}）の北^{きた}側^{がわ}に塔^たを建^たてた。

馬^{うま}子^この父^{ちち}、蘇^そ我^が稻^{いな}目^めが、五^い五^ご三^{さん}年^{ねん}、百^{ひゃく}濟^だ聖^{せい}明^{めい}王^{おう}より仏^{ぶつ}像^{ざう}と經^{きやう}論^{ろん}を贈^{くわ}られて以^{もつ}来^{らい}三^{さん}十^{じふ}余^よ年^{ねん}たつ。

大^{だい}王^{おう}家^けの直^{ちよく}參^{さん}である軍^{ぐん}事^じ伴^{（ともものみやつこ）}、造^{ぞう}物^{ぶつ}部^ぶ氏^しは、この仏^{ぶつ}教^{きやう}を異^い国^{こく}の蕃^{ばん}神^{しん}として、徹^{てつ}底^{てい}的^{てき}に、蘇^そ我^が氏^しと闘^{たう}争^{しやう}を繰^{くり}り返^{かへ}して来^きた。

仏^{ぶつ}教^{きやう}に對^{たい}して、疑^ぎ心^{しん}暗^{あん}鬼^きの大^{だい}王^{おう}家^けをバツクに、何^{なん}度^ど、蘇^そ我^が氏^しの寺^{てら}を焼^やき、仏^{ぶつ}像^{ざう}を難^{なん}波^はの堀^{ほり}江^えに流^{なが}したか分^わかからない。

仏^{ぶつ}像^{ざう}を堀^{ほり}江^えに流^{なが}したのは、や^やつて来^きた百^{ひゃく}濟^だに送^{くわ}り返^{かへ}すためであつた。

敏^{みん}達^{だつ}大^{だい}王^{おう}も、反^{はん}仏^{ぶつ}教^{きやう}的^{てき}立^{りつ}場^{ばう}を固^か持^ぢしていたが、晩^{ばん}年^{ねん}は炊^{くわい}屋^え姫^{ひめ}の熱^{ねつ}心^{しん}なすすめもあり、や^やや、排^{はい}仏^{ぶつ}に對^{たい}して氣^きが弱^{じやく}くなつていた。そんな時^{とき}、馬^{うま}子^こが塔^たを建^たてたのだ。

仏^{ぶつ}塔^{たう}である。

当時^{たうじ}、天^{てん}に向^{むか}かつて建^たてる柱^{はしら}は、天^{てん}の神^{かみ}を祭^{まつ}り、神^{かみ}を呼^よぶものである。

馬^{うま}子^この行^{ぎやう}為^ゐは、ま^まさに、排^{はい}仏^{ぶつ}派^{はい}に對^{たい}する宣^{せん}戰^{せん}布^ふ告^こといつてよかつた。

飛^{あすか}鳥^かの人^{ひと}々は騒^{さわ}然^{ぜん}となつた。

布をまとった庶民は裸足のまま、口々にさえざりあいながら、異国の神の塔を眺め、馬に乗った貴人は、馬の脚を止め、大事変の予感に緊張しながら、仏塔を眺めた。

なかには、馬から下り、馬に隠れて、仏塔を盗み見しながら、他人に気付かれないように、一礼する者もいた。

これから先、大事変が起きた時、吾が身の安泰を密かに願ったのだ。その巨大な仏塔は、仏教を信じない倭国の貴人たちにも、それだけの圧迫感を与えたのである。

もちろん、その仏塔の背後には、馬子と、馬子を守る東漢氏の勢力があった。

馬から下りた貴人は、それを恐れたのかもしれない。仏塔が建てられている間は、東漢氏の兵士たちが、排仏派が塔を壊しに来るのを予想し、守っていたので、塔は何事もなく、完成したのである。

塔が完成するとともに、守っていた兵士たちも去った。

塔を見て怒ったのが、排仏派の巨頭、物部守屋であった。

馬子の奴いよいよ挑戦して来たな、と怒りと憎悪の眼で塔を眺め、磐余の譯語田幸玉宮に駆けつけた。敏達大王の宮である。

磐余は今の桜井市と、その西南部で、大王家にとっては、古くからの神域ともいうべき場所である。

神話的な神武天皇の名が神日本磐余彦尊と書紀にあるのを見ても、日本神話と、磐余との関係

の重要さが理解できるだろう。

譯訳語田幸玉宮は、磐余の一部で、今の桜井市戒重に当たる、という。

宮といっても、当時の宮は、掘立て形式で、もちろん、大極殿などない。寢所、女官たちの部屋、祭り事の場、それに群臣たちとの、会合の間があつたくらいだろう。

宮廷警備の兵士たちの屋形は宮の外にあつた、と思われる。宮は茅葺きで、斉明大王が板葺きの宮を造るまでは、屋根は茅葺きであつた。

そのころ、すでに敏達は病床に伏していた。

寝たり、起きたり、という生活である。敏達の宮を守っていたのは、三輪山の豪族、三輪君逆であつた。三輪君逆はまだ三十半ばだが、大王家の忠臣で、敏達と炊屋姫の信頼が厚かつた。

ことに炊屋姫は、凛々しい武人に好意を抱いていた。これは、三輪君逆も同じだった。三輪君逆にとって、炊屋姫は皇后であり、近寄りがたい存在だが、彼は、自分に好意を寄せてくれる美しく神秘的な感じの炊屋姫に、密かに思慕の念を抱いていた。

これは、三輪君逆一人だけではない。炊屋姫には伯父にあたる馬子、それに、異母兄弟の穴穂部皇子もそうであつた。

ことに、穴穂部皇子は、炊屋姫を口説き、なんとかして、次期大王の地位を得ようと、このころ、宮廷に入りびたっている。

時に、炊屋姫、三十二歳である。

守屋が駈けつけた時は寒い磐余の冬もようやく去り、春を告げる暖かい陽射しが、寝所の傍の縁に流れ、敏達は鹿の毛皮に坐り、炊屋姫とともに庭を眺めていた。

皇子は、敏達の病氣見舞いと称して、今日も来ていた。

だが炊屋姫が、敏達の傍を離れないので、吹き抜けの床に坐り、女官たちに酒を運ばして飲んでいる。

三輪君逆は守屋の兵士が宮廷に入るのを止めたが、守屋は、それでも、二人の屈強な輩下を連れて入って来た。二人の輩下は、敏達と、炊屋姫の姿を見て、柵門の傍の土の上に坐った。

「大王、大臣が^{おおみ}大野丘の傍に建てられた蕃神の塔をご覧になりましたか？」

守屋は二人に一礼すると、息をはずませながらいった。炊屋姫は、守屋が膝もつかないので、憤りの視線を守屋に向けた。

「大連、^{おおらじ}立ったままで、大王に話されるのは、無礼でしょう」

勝ち気な炊屋姫の声は鋭かった。守屋にとって、馬子の姪である炊屋姫は、なんとなく煙たい。それに勝ち気で、政治のことも、口をはさむ。また、氣力の弱くなった敏達は、このころ、炊屋姫に寄りかかっている。

炊屋姫に一喝され、守屋は仕方なく膝をついた。守屋は一氣に喋った。^{しゃべ}

大王家は、昔から、天と日を崇拜している。あんな異国の神をのさばらせたなら、大王家の權威がなくなるのは眼に見えている。大臣馬子の行為は、大王家に対する挑戦としか思えない、と

唾を飛ばしながらいった。

「吾は、今すぐにも、塔と仏像を焼き払わなければ、天下は乱れ、大変な事態が生じる、と思います。どうか、大王のご許可を賜りますよう」

敏達は困ったように吐息をついた。

敏達の父、欽明大王は、蘇我氏だけが仏教を崇拝するのならよい、と認めたのだ。

それが、蘇我氏以外にも拡まり、大和の渡来系氏族、河内を本貫地とする渡来系の史氏なども、すでに、仏教を崇拝している。

「困ったのう。何も塔など、建てなくてもよいのに、排仏派の連中を刺激するばかりじゃ、いったいどんな塔かな」

「もの凄いい塔です、三十尺（九・一メートル）以上はありましょう。大王、ぜひ一度、ご覧ください」

「三十尺以上も」

さすがに敏達は驚いたように呟いた。

「あなた、春とはいっても、まだ寒うございます。それに、ここから大野丘まで、かなりあります。もしお出かけになって、風邪でも引かれたら大変です。私には、その方が心配です。大連、そなたは、大王のお身体のこととは、考えないのですか」

守屋は、内心、舌打ちした。いつもそうだ。何かといえば、小賢しい理屈で押し切られる。

全く、美しい顔に似合わない后である。

「そんなことはございません。大王のご承認さえいただければ、吾が今すぐ焼き払ってまいります」

敏達は瞑目した。すぐには返答できない。

その時、炊屋姫は、先日、馬子がやって来て、告げた言葉を思い出した。炊屋姫も塔を見て吃驚し、馬子に、こんな塔を建てれば、守屋を始め、排仏派が黙っていないだろう、といった。

馬子は、炊屋姫を可愛がっている。炊屋姫を敏達の皇后にしたのも馬子だし、私部も設置してくれた。私部は、皇后のための部で、皇后を養うための民を持つ領土であり、制度である。

馬子は、茫洋とした顔に笑みを浮かべて、炊屋姫の質問に答えた。

「そのご心配は無用です。排仏派が何をしようと、時の流れに逆らうことはできません。大陸の諸国は、皆、仏教を崇拜しています。これから、大陸の文化を吸収しなければならぬ大切な時代に、倭国独り、仏教を取り入れないわけには、ゆかないでしょう。塔を壊すならば、壊せばよい、焼くなら、焼けばよい。もし、守屋が、そういう行動に出れば、仏教を崇拜している人々は、ますます団結するでしょう。しだいに、守屋は取り残されます」

ひょっとすると馬子は、塔や仏像を壊され、焼かれるのを、待っているのかもしれない、と炊屋姫は思ったのだ。

炊屋姫が敏達の耳に囁こうとした時、酔った穴穂部皇子が、赫い顔で、縁伝いにやって来た。

炊屋姫は、無神経で感情家のこの皇子が嫌いだった。自分を見つめる時の、好色な眼付きも気に入らない。

それに、自分を褒める言葉といえば、美しいとか、輝くようだとか、そんな単純な言葉だけである。立て膝のまま一礼した守屋に、穴穂部皇子は、大きな声でいった。

「大臣が建てた塔のことじゃな、飛鳥は大騒ぎじゃ、大連は、それで怒っておるのじゃな。大連が怒るのも無理はない、吾も吃驚したわい。大王のお考えはいかがですか？」

「どうか、あまり、大きなお声は出さないでください。大王はお加減が悪いのです」

「いや、皇后、これは悪うございました。吾は、大王のお見舞いに来ておるのです。どうも、声が大きいのはよくない」

酒臭い息を吐きながら、穴穂部皇子は、炊屋姫の傍に坐った。そして炊屋姫の耳に囁いた。

「皇后のお考えを申されたらよい。吾も賛成します。たとえ、大王が反対されても」

それが、炊屋姫の歓心を得る言葉であるのは明らかであった。

炊屋姫は、眉を寄せながら、敏達にいった。

「お考えどおりなさっては、いかがですか」

「そなたの気持ちは？」

敏達は、炊屋姫が、崇仏に傾いているのを知っていた。炊屋姫は謎めいた微笑を浮かべた。

「このままでは、おさまりますまい。大王家は、天を祭って来ております。大連がしたいように、

させてあげてはいかがでしよう」

敏達は、意外そうに、炊屋姫を見た。

「構わぬのか、焼いても」

「はい」

と炊屋姫は頷いた。

穴穗部皇子が叫んだ。

「大王、吾も、その方がよい、と思います」

穴穗部皇子にとっても、炊屋姫の答えは予想外のものだったに違いない。

「そうか、大連、気の向くままにせよ」

守屋は、一瞬、顔を輝かせて一礼した。

「それでこそ、倭国の大王です。中臣勝海も連れてまいりましょう」

そういうと、守屋は柵の方に向かって走り出した。

書紀に記された中臣勝海の実在性は稀薄である。だが、敏達紀には、六年春二月、日祀部ひのまつりべを設置したことが記載されている。

これは、蘇我馬子らの崇仏派に対抗するため、物部守屋たち排仏派が、大王家古来からの太陽崇拜を再認識させるため、当時、まだ排仏派であった敏達大王らと計り、置いた部である。当然、神祇しんぎの儀も必要となる。

中臣という氏は、田村圓澄氏えんちやうによれば、「中執り臣」、つまり、神と君との中を執り申すことから生まれたようである。

とすると、敏達朝あたりに神祇の氏として存在が認められたのだろう。欽明朝、という「中臣氏本系帳」や「尊脈分脈」の記述は信じられない。

勝海が、實在性稀薄な人物だとしても、日祀部設置とともに、中臣氏なるものの誕生が、この辺りだと考えても、おかしくはないだろう、一応ここでは、書紀どおり、勝海がいたことにおく。

もちろん、書紀が述べるほど、高い地位ではない。

守屋が宮を取り囲む柵門から出ると、間もなく馬の蹄の音がした。

穴穗部皇子が、大きく背伸びした。

「大王、もうすぐ春です、桜が待たれますなあ。后もご一緒に、ぜひ吉野に参りたいものです。それに、宇陀うだに、狩りにも行きたい」

「なさりたいことが、山ほどあって、結構ですわね」

炊屋姫は皮肉をいったが、穴穗部皇子には、通じなかった。単純で粗野な皇子は、炊屋姫が、排仏派だ、と思い込んでしまった。そして、大野丘の塔の話を始めた。感情家らしく、その塔の巨大さを、身振り、手振りで話す。

「皇后のおっしゃるとおりです。あんなものが、堂々と建っていたなら、この世は、どうなるか